

2. 入信後の変化

入信後、信者は自身がどのように変化したと捉えているのだろうか。それをまとめたものが次の表である（複数回答）。

(表1) 入信後の変化

入信後の変化	天理教		P L教団		生長の家		カルデシズム	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
性格の向上	40	54.1	30	27.3	53	60.2	30	50.8
病気の治癒・経済状況の好転	12	16.2	26	23.6	9	10.2	12	20.3
生活の指針の発見	10	13.5	29	26.4	3	3.4	2	3.4
家族のつながりの強化	6	8.1	16	14.5	6	6.8	8	13.6
神認識の自覚	4	5.4	2	1.8	15	17.0	3	5.1
信仰心の目覚め	2	2.7	7	6.4	2	2.3	4	6.8
計	74	100.0	110	100.0	88	100.0	59	100.0

結果を見る限り、P L教団以外はいずれも「性格の向上」を指摘する者が過半数を超えている。入信後のそのような意識の変化は注目すべきである。というのも多くのインフォーマントは病気の治癒や経済状況の好転といった、いわゆる「おかげ (graça)」を得たいという気持ちで宗教を求めたのであり、彼ら自身の変化を願っていたわけではなかったからである。彼らは教えに基づいた自己変容を獲得したのである。

ここで、「性格の向上」の具体相を教団ごとに見ておこう。天理教の場合には、「人に求めることが少なくなった」とか、「先ず自分を反省するようになった」と語る者が多い。問題を解決するには自分自身の心の「ほこり」を払い、「いんねん」を切り替える努力をすることが大切だという指導を受け、先ずは自分の心の持ち方を変えることが大切だと学ぶ。さらに、苦しみの原因は自分自身にあることを自覚して、困窮している周囲の人々の救いを願うのみならず、他者救済のために働きかけることが大切であるとも教えられる。そこには教祖が残した生き方である「ひながた」に自己を照らし合わせながら自らの欠点を修復するという内省的な意識が強調されている。これは天理教が説く「心の成人」のための方法であり、教祖の生きざまを人間のあるべき姿として指定する天理教の人間観があらわれたものである。

次に生長の家では、「自信や勇気が持てるようになった」「自分自身が理解できるようになり、対人関係が善くなった」「感謝の念が湧いてポジティブな思考ができるようになった」と答える者が多い。人間が潜在的に持っている能力を自覚して行動することが大切だという自己啓発的な発言が看取される。「人間神の子」としての自己および他者認識。そこから派生する自他との和解と赦し。それらはすでに人間に付与されていると教えられる全能なる神性への知覚から生まれるものだが、そこから感謝の気持ちや積極性が呼び起され、外へと向かう積極的な態度が導かれる。これが生長の家信者にとっての「性格の向上」である。

それでは、カルデシズムの場合はどうだろうか。カルデシズムでは、「自尊心、虚栄心、欲深さを自覚するようになった」とか、「カリダージ（慈善）を実践するようになって隣人愛を表現することができるようになった」という回答が多い。カルデシ

ムの教理は、輪廻転生と因果応報を説いて「業」という過去の負債を支払うことが人間に課された使命であると説く。病気や災難は前世からの負債の現れだとするのである。そして、人間はこの世においてはまだ不完全な存在であるから、少しでも完全なる存在に近づくことのできるように「メレシメント（天賦の徳）」を蓄えてゆかねばならない。とすると、カルデシズムでも天理教のように内省的な思考によって謙虚に自己の不十分さを反省する姿が強調されているようである。

P L教団の場合には、「性格の向上」は他教団ほど数値が高くなかった。しかし、これは「生活の指針の発見」への回答数と合わせて考えるべきだろう。というのもP L処世訓21か条で示された根幹的教義は具体的な生活指針として伝えられており、各自の「心癖」を取り除くことで我執に囚われた自己の解放を促すと教えているからである。自由回答では「自他を祝福できるようになった」「隣人のために有益な働きができるようになりたいと思うようになった」「積極思考ができるようになった」というものが目立つ。これらはP L処世訓に示された、「表現せざれば悩がある（第4条）」「日のごとく明らかに生きよ（第8条）」「自他を祝福せよ（第10条）」といった定式化された教えを自分なりに表現したものとみられる。「生活の指針の発見」が「性格の向上」に繋がっているのである。実はP L教団も天理教やカルデシズムのように内省的な思考を評価する。しかし、P L教団では「悟る即立つ（第17条）」というように、内省は求めるがそれ以上に積極的な他者への働きかけを信者に促している。その意味において、「いんねん」という過去から現在、そして未来へと続く時間の流れの中で自己を認識させる天理教やカルデシズムと異なっている。P L教団における自己認識は「今、この瞬間」の「芸術（表現）」として獲得される。同教団で輪廻転生を説かないのは、このような理由によるものと思われる。

最後に、「神認識の自覚」について触れておこう。この設問はそれぞれの教団が神の存在をどのように説き、ブラジル人に印象づけているのかを表すデータとして興味深い。多くの人々の以前の宗教はカトリシズムである。カトリシズムでは、神は人間の罪を裁く存在として畏怖されている。しかし、これら四つの教団に入信した人々はそれを否定して、神は父あるいは親として身近な存在だと理解するようになっていく。生長の家でその数値が特に高いのは、人間にはカトリック的な意味での罪はないと宣言していることによるだろう。逆にP L教団はもっとも低い。P Lでは神を大元霊（みおやおおかみ）と呼び、人間は神の一部として生かされていると説く。そこには新宗教の生命主義が見て取れるが（Vol.16 No.1 参照）、人間は単に生かされているだけでなく自らの意志によって生きることができると同教団は強調する。「神の表現」としてこの世を自由に創造する使命が与えられている人は、全体（神）と調和する必要がある。しかし、自己表現の自由性や創造性こそが神の業を生み出すと考えられていることから、神認識の変化よりも自己のありように関心が向かうのだろうと思われる。